

第12期東京都生涯学習審議会

第5回全体会

会議録

令和4年5月31日（火）

午後2時00分から午後4時00分まで

都庁第二本庁舎31階 特別会議室27

○出席委員

笹井 宏益 会長

志々田 まなみ 副会長

海老原 周子 委員

澤岡 詩野 委員

竹田 和広 委員

野口 晃菜 委員

広石 拓司 委員

福本 みちよ 委員

横田 美保 委員

第12期東京都生涯学習審議会 第5回全体会 会議次第

- 1 開会
- 2 議事
各委員からの「検討枠組み」を受けた提案
 - (1) 野口晃菜委員
 - (2) 竹田和弘委員
- 3 今後の予定
- 4 閉会

【配付資料】

資料 第12期東京都生涯学習審議会 第5回全体会 審議資料

報告資料 「都立学校（高校）と連携・協働したインクルーシブな教育活動の在り方—都立学校施設等の効果的活用の在り方—」（野口委員）

報告資料 「都立学校（高校）と連携・協働した青少年の育成—都立学校施設等の効果的活用の在り方—」（竹田委員）

第12期東京都生涯学習審議会第5回全体会

令和4年5月31日（火）

開会：午後2時04分

【生涯学習課長】 それでは、定刻を少し過ぎてしまいましたけれども、ただいまから第12期東京都生涯学習審議会第5回全体会を開催させていただきたいと思います。

本日は松山委員から御欠席の御連絡を頂いております。まだもうお一方お見えになっておりませんが、じきお見えになるかと思っております。

それでは、早速ですが、資料確認をさせていただきます。資料につきましては、パワーポイントでお示しさせていただきますけれども、「第12期東京都生涯学習審議会 第5回全体会 審議資料」及び野口委員報告資料、それから竹田委員報告資料となります。本日はタブレットを通じて御覧いただきますよう、お願いいたします。

それから、本日は傍聴者はゼロということでございます。ですので、このまま進行させていただきたいと思っております。

それでは、これから笹井会長に進行をよろしくお願いいたします。

【笹井会長】 皆さん、こんにちは。どうもお忙しいところお集りいただきまして、ありがとうございます。今日はとても広い部屋で、景色もよくて、伸び伸び議論ができるかなというふうに思いますが、どうぞよろしくお願いいたします。

本日は、前回の審議会で設定しました都立学校開放事業の検討枠組み、これは後で説明があるかと思いますが、それを受けて、委員の先生方の専門分野から施策などの提案を頂きたいというふうに考えております。

それでは、まず初めに事務局から資料の説明をお願いいたします。

【主任社会教育主事】 では、私のほうから御説明いたします。前回御欠席の委員もいらっしゃったので、簡単に前回の要点をかいつまんで御説明いたしたいと思っております。

第4回の審議会では、第3回までにいろいろと委員から御指摘いただいた内容を踏まえて、都立学校施設の今後の効果的活用の在り方について検討に当たり必要な視点という形で三つ整理をさせていただきました。

1点目は、学校開放における学校教職員の負担軽減で、これは学校における働き方改革を推進していく観点から学校開放を見直していこうと。

2点目は、議論の中で事務局も自覚化するに至ったのですけれども、やはり学校が教育機関であるという性格を踏まえて、学校の自主性、管理者の管理の下に自らの意思をもって継続的に事業運営を行う機関であるという性格を踏まえた観点からの学校開放を考える必要があるのではないか。ここは3回目まで事務局のほうで出していた視点の中ではかなり弱かった部分を自覚化して入れていこうと。ここは社会に開かれた教育課程と新しい学習指導要領の考え方に連なるものと位置付けさせていただきました。

そして3点目は、審議会の当初から述べさせていただいている「未来の東京」戦略の実現ということで、都立学校は都民の税金で建設された公の施設だという性格を鑑みた学校開放の在り方があるだろうということを整理させていただきました。

当然、今後の学校開放の在り方を考える前提ということも確認をさせていただいて、一つ目は、教職員に負担をこれ以上かけない——これ以上かけないというか、負担を減らすことを考える。あと、学校教育上支障のない限りと様々な法律に規定されておりますが、その視点を踏まえることは不可欠だ。それを踏まえた開放の事業の在り方を考えようということでございます。

審議に当たっての留意点ということで、「学校開放」と「地域に開かれた学校」というふうに言葉の捉え方を少し整理してみたり、2番目は、社会的必要性、「未来の東京」戦略の視点、地域のニーズ、学校のニーズがシンクロしていく。どこの部分でそれぞれのニーズが一致するかも考えながら施策を考えていこう。3点目としては、都立学校は小・中学校とは性格的に異なることを踏まえていく。日常生活圏にある小・中学校とはおのずと性格が異なる部分があることを踏まえて学校開放について考えていこうというようなことを挙げました。

その上で都立高等学校を例に学校開放のパターン化を試みて議論をさせていただいたところです。おおむね前回御出席の委員のほうからは了解いただけたと理解しております。学校開放のパターンというのは、これまで公開講座と学校施設開放事業をやっております。パターンⅠからⅤまで描いておりますが、学校施設開放というのは、学校施設は都民の税金によって設置された施設であるという性格を考えると、その納税者に対して一定の寄与をする役割は必要になってくるだろうというベースは持ちつつ、その上にどんなソフトを載せていくかということを整理する。パターンⅡで言うと、高等学校が自らの意思で教

育機能を開放したいと考えていた場合は、それはそのまま進めていただくのもありということでございます。パターンⅢからパターンⅤまでが新しい切り口で考えられないかということでも挙げたものです。

パターンⅢは、先ほど紹介したところで言うと、ここの②に該当する視点ですね。社会に開かれた教育課程の実現を考えた上で、学校の活動をサポートするNPO等と連携協働した学校開放の在り方、そういったNPOに学校施設を提供する対価としてキャリア教育や総合的な探究の時間の支援が受けられる。インタラクティブなどといいますか、相互浸透といいますか、そういうものが図られるような教育活動ができるパターン。ここは高等学校の教育意思も一定反映される形になるだろうと。

パターンⅣとパターンⅤは、どちらかというとな政策的な意味で、学校の管理機関である東京都教育委員会が社会教育の実施主体となって開放するような形も考えられるだろう。パターンⅣの場合は、区市町村や知事部局の施策と連動した形で施設を開放する。パターンⅤに関しては、教員を公開講座の講師とするのではなくて、前回は紹介させていただいた公益財団法人東京学校支援機構、いわゆるTEPROと呼んでおりますけれども、TEPROのSupporter Bankの登録人材をはじめとした教育人材の力を都民の生涯学習の推進に活用するという観点で事業化をする形で整理する。

この中のパターンを選択して学校が行えるような形で将来的に学校開放事業のパターンを整理していったらいいのではないかとということまで前回は議論させていただきました。

今回から数回、この提示したパターンに基づきながら、各委員がそれぞれのスタンスで、今日は野口委員で言うと障害のある人々とのインクルーシブな社会をつくるにはどうしたらいいかという観点から、竹田委員には子供・若者の社会参画を学校と協働でどう進めていくかという観点から、それぞれこのパターン化を踏まえてコメントを頂くといいますか、御提案を頂く時間を設けたいと思っております。以降は野口委員、竹田委員の発表を軸にいろいろと活発な意見交換ができればいいかなと思っております。

事務局からは以上でございます。

【笹井会長】 ありがとうございます。

ということで、本日は野口委員、そして竹田委員から御提案を頂きたいと考えております。どうぞよろしくお願い申し上げます。

初めに、野口委員から御報告、御提案をお願いしたいと思っております。報告時間は20分程度でお願いできると幸いです。

なお、このお二人に限ったことではないのですが、委員の皆様、発言する際にお手元のマイクのボタンをオンにしたりオフにしたりしながら、発言される時はオンにさせていただいて、終わったらオフにさせていただいてという形でしていただけるとありがたいと思います。

それでは、野口委員、どうぞよろしくお願いいたします。

【野口委員】 よろしく申し上げます。私のほうからインクルージョンという観点から発表させていただきたいと思います。

これまでも自己紹介したと思うのですがけれども、改めて自己紹介の文章を載せておきました。私自身はアメリカに小学校6年生から高等学校3年生までいて、その後、主に学校教育におけるインクルージョンについて研究をしています。今はいろいろな教育委員会、市区町村・都道府県の教育委員会と協働したり学校と協働して、どうやったら学校教育をよりインクルーシブにできるのかという観点でコンサルテーションや研修などを行っています。

改めてこのインクルージョンという概念についてまず皆さんと共通理解を取りたいと思っています。インクルージョンを一言で定義すると、全ての人が平等に大切にされ、所属感を持ち、尊重され、参加できている状態です。特にインクルージョンのためには、どうして今社会がインクルーシブではないのか、なぜエクスクルーシブなのかと考えると、社会のありようはマジョリティー、多数派を中心につくられているからと考えることができます。様々な社会の制度もそうですし、建物もそうですし、文化もそうです。あと、いろいろな商品もそうですけれども、マジョリティー属性を中心とした現在の社会のありようを変革していく必要があります。マイノリティー属性も含めた多様な人がいることを前提に社会を設計していくというのがインクルージョンの考え方です。

下に写真を載せていますが、これはそれぞれ象徴的な出来事です。例えば国会がバリアフリー化されたのは去年の話です。どうしてこれまでバリアフリー化されていなかったのかというと、これまで重度の障害のある人が国会議員になることが想定されていなかったからであるということですね。そういうことがいろいろなところで起きている。BAND-AIDという商品ですけれども、BAND-AID という会社は150年ぐらい続いているらしいのですが、これも実は単色、白人の肌の色でしか展開されていなかったそうです。Black Lives Matter を踏まえていろいろな色が展開されるようになってきたということです。一番右側は、去年、厚生労働省が出した新しい履歴書の案ですね。男と女という選択肢を

なくして、任意の記載にしています。男にも当てはまらない、女にも当てはまらない方、ノンバイナリーの方がいらっしゃる。あるいは、生まれたときに割り当てられた性別と自分がアイデンティティを持っている性別が異なる方がいることを前提に本来作られていればよかったものですが、最近になってようやく多様な人がいることを前提にいろいろなものが作り替えられつつある状況です。一方で、そうではないもののほうがまだまだ多い状況なのではないかと思います。

この考え方は、障害の分野では障害の医学モデルと社会モデルと呼ばれる考え方の社会モデルという考え方に立脚しています。医学モデルや個人モデルと呼ばれる考え方は、障害というものは個人の皮膚の中であって、障害に伴う困難さの原因は個人の障害にある。障害のある人が社会に適応するためには、個人の障害を治療したり改善したり目立たなくすることが必要という考え方ですけれども、社会モデルというのは個人と社会環境の相互作用の中に障害があるという考え方です。障害に伴う問題の原因を、社会の側が障害のある人を想定していないことに求めて、障害のある人がいることを前提として社会を変えていくことを社会モデルと呼びます。今インクルージョンというのはこの社会モデルという考え方に立脚していて、障害だけでなく、例えば外国にルーツのある方だったり、経済的に貧困の方たち、より筋力がない人、より抑圧を受けやすい人たちも含めた社会の構造をつくっていくというのがインクルージョンの考え方です。

日本におけるインクルージョンに向けた動向ですが、障害関連の分野でしか日本はまだまだインクルージョンは語られづらいのですが、いろいろな障害分野においては本当にこの20年ぐらいでいろいろな制度が出てきました。つい先日も障害者情報アクセシビリティ・コミュニケーション施策推進法という新しい法律が成立しましたが、障害のある人がいることを前提として情報のアクセシビリティなどを考えなければいけないということですね。例えばこの場、今日傍聴している人に聴覚障害のある方がいらっしゃったらどうするのかということを含めてやっていかなければならない。そういう意味では、日本全体として、特に障害の分野においてはインクルーシブな社会を形成していきましょう。そのために、教育分野ではインクルーシブ教育システムを構築していきましょう。そのために必要な環境整備や合理的配慮をしていきましょうということが進みつつあります。

では、教育の分野ではどうなっているのかというと、日本は障害者権利条約に2014年に批准していますので、その中にインクルーシブ教育システムを構築していかなければ

ならないという形で記載があります。このインクルーシブ教育システムというものは、人間の多様性を尊重しましょう。また、障害のある・ないにかかわらず最大限度まで発達して自由な社会に参加できることを可能としていきたいと思いますということが目的として設定されていて、そのために障害のある人とない人が共に学ぶ仕組みをつくるべきということが記載されています。そのために、自己の生活する地域において義務教育の機会が与えられること、個人に必要な合理的配慮が提供されることをやらなければならないとなっています。

一方で、すみません、字がぼやけて分かりづらいのですが、こちらを御覧いただくと分かると思います。では、障害のある人とない人が共に学ぶ仕組みをつくりましょうとありますが、2014年以降そういう仕組みがつくれているかということ、特別支援学校に在籍する子供たちの数は年々増加しています。20万人ぐらいの子供が特別支援学校に通っている状況です。かつ、特別支援学級に在籍する子供たちも年々増加している状況があります。

日本においては、このように特別支援学校や特別支援学級を用意した上で、交流及び共同学習といって、通常の学級に在籍する子供たちと特別支援学級や特別支援学校に在籍する子供たちが交流することでインクルーシブを目指せるのではないかという考え方を持っています。その上でなので、特別支援学校の学習指導要領にも日本の通常の学校の学習指導要領にも、交流しなければならないという項目があるのですけれども、では、実態としてどれだけ交流できているかということ、これを御覧いただいて分かるとおり、特別支援学校と通常の学校で交流している学校は、2～3割の学校のみが交流をしている状況です。小・中学校においては8割が交流していない状況が分かるかと思います。

交流している学校に中身を聞いていくと、交流していたとしても各学校段階とも年に2～3回のみなので、インクルーシブを目指すと言いつつ、共に学ぶ、共に過ごす、交流をする機会がいかに少ないかというのがお分かりいただけるかと思います。年に1回や年に2～3回障害のある人と接することで本当に地域で共存していくのが可能なのかどうかということはいろいろなところで指摘されていることで、私自身は問題意識として持っているところです。

改めてまとめると、インクルージョンの現状としては、障害者権利条約の批准などを踏まえて、可能な限り共に学ぶインクルーシブ教育システムの構築が目指されています。一方で、特別支援学校や特別支援学級の在籍者数は年々増加しています。特別支援学校と地

地域の学校との交流については、そもそも交流をしている学校はすごく少なく、かつ、交流をしている学校であってもほとんどが年に1～3回の実施であり、特別支援学校に通う子供と地域の学校に通う子供について地域における日常的な交流の機会がないということがよく分かります。

その結果どうなるか。前の回でも紹介したかもしれないのですが、例えばどういうことが起きているかという、障害のある人の施設を建設するとき、地域でいまだにすごく反対運動が起きるのです。施設コンフリクトといって、施設を造るときに住民が反対をすることに関する研究を見ると、約2割のみの方が自分の家の隣に精神障害者施設ができることに賛成している状況です。2割の人しか、障害のある人が自分の隣の家に住むことに賛成できていない状況であるというのがよく分かります。また、これの調査の中身を見ていくと、人口の半分以上の人がそもそも障害のある人と接したことがないというデータもよく分かります。差別は駄目と皆さん学校で学ぶと思うのです。差別は駄目だけれども、自分の近くに障害のある人が来るのが怖い、不安だというふうに思っているのが現状なのではないかと思えます。

このほかにもどんな問題が起きるかという、記憶に新しいところで言うとオリンピックのときに、開会式で、皆さん何が問題になったか御存じでしょうか。会場には手話通訳の方がいらっしゃったにもかかわらず、放送されるときには手話が放送されなかったという形で、どうしても生放送だと字幕もすごく遅くなるのです。多様性と調和を掲げているオリンピック、かつ、あれだけお金がかかっているオリンピックでそういったことが起きてしまったこともあります。

そのほか、去年、私の知り合いの車椅子ユーザーの方が無人駅を利用しようとして、そこで断られた。それは障害者差別解消法で言うところの合理的配慮として、無人駅はエレベーターがないので車椅子を運んでほしいという要望を駅員にしたけれども、そこで拒否をされた。それは障害者差別解消法で言うところの合理的配慮の拒否になりますので、それは差別につながってくるということでインターネット上で告発をしたところ、その人自身が非常にたたかれてしまうことが起こって、いまだ誹謗中傷を受けている。

これは結構根深くて、この話を講演や学生などにしても、障害のある人ももっと感謝をするべきなのではないかということがどうしても起きてしまっているのです。子供たちも大人も差別をしては駄目というふうに学んできているのですけれども、結局そうやって日常の中で接する機会がないことによって、どう接していいか分からない。あとは、そも

そも社会というのは健常者仕様にできていて、その恩恵を実は自分が受けているにもかかわらずそこに対して自覚的ではないことが起きてしまって、そこでインクルーシブではない社会。そういう人たちが大人になって意思決定をする役割になって、企業で商品を作ったり、官僚として政策をつくったりすると、障害のある人をはじめとしたマイノリティー属性にとって抑圧されるような構造が維持され続けてしまう。そういう課題があるかというふうに考えています。

かなり大きな話をしてしまったのですが、私の問題意識としてはそういったところであって、それを踏まえて、都立学校とどういうふうに連携して、特に特別支援学校が都立としてありますので、これはうまく活用していくべきだと考えています。前提として、前々回かに私が伝えたことにもつながるのですが、インクルーシブな教育活動を推進していきたいと思う一方で、この場だけがインクルーシブである。例えば特別支援学校でやる活動だけがインクルーシブですというふうにするべきではないと私は思うのです。そもそもどの学校で何をやるにしても前提としてインクルーシブな場にしていくべきであると考えています。なので、そもそも都立学校を使って、NPOだったり企業だったり、もしくはTEPROの方たちが講演をするだったり、どんな活動でもいいのですけれども、どんな活動をするにしても、都立学校を使うのであれば、条件として、それはインクルーシブなものに、要は誰でもアクセスできるようにしなければならないという条件は付けていかなければいけないのではないかと考えています。

これは目的別に考えたときにも、本当はキャリア教育や居場所支援や生涯学習などが全てインクルーシブになっている状態が一番理想的だと思うのですが、それだけだと恐らくインクルーシブな教育活動がなかなか推進されづらいと思うので、インクルーシブな教育活動も一つ目的に置いて進めていけるといいのではないかと考えています。先ほどお伝えしたとおり、そのためには、そもそも都立学校を活用したいNPOなり企業なり、誰であれ、誰もが参加できるような環境整備をしていきたいと思いますということルールとして置けないかと考えています。

それは、学校なので当然バリアフリー化がバリアフリー法によって推進されていると思うのですが、それでもバリアフリーではないところもあると思うので、この会議と関係あるか分からないですが、なるべくバリアフリーをそもそも進めていくこと。あとは、例えば資料にルビが付いていたり、手話通訳などの情報保障がしっかりとされていたり、参加ルールが明文化されていたり、何かあったときの相談窓口や責任者が明確にされてい

るのも大切だと思います。

当然そのためにはコストがかかってくると思うので、このコストやノウハウについては都が支援できるガイドラインをつくったり、そういうことをやる場所についてはプラスアルファで例えばこういう助成を出しますなど、そういうことが可能になるととてもインクルーシブな環境整備は推進されるのではないのかなと思っています。

それを踏まえた上でインクルーシブな教育活動が推進されるような何かしらの工夫ができないかと思っています。先ほどのパターンⅣになると思うのですが、例えば地域のNPOや企業といったところでも特にインクルーシブな活動をしているところを募集したり、そういったところを優先に活用していただけるような仕組みが必要なのではないかと思います。

活動としては、正直、何でもいいと言うとあれですけども、いろいろな活動があると思います。ただ、そこでしっかりと交流が促されたり、安心して誰もが参加できるような体制を整えておくのがポイントではないかと思っています。活動の案としては、いろいろな活動が世の中にはあるので、こういった方たちと協働したり、うまく活用していただけないのではないのかなと思っています。例えば私も今一緒に少しプロジェクトをやっているダイアログ・イン・ザ・ダークという活動があります。皆さん御存じかもしれませんが、暗闇の中を視覚障害のある方がリードしていろいろな活動をしていく。その中ではマイノリティーとマジョリティーが逆転したりといった体験ができるものですが、例えばこういった活動を特別支援学校という場を使ってやる。そこに地域の小・中・高の子供たちが来れるような座組をつくる。先ほどのどうしても交流及び共同学習が進まない理由の一つは、先生たちも何をしたらよいか分からないのですね。やらなくてはいけないのは分かっているけれども、どうしたらいいか分からないみたいなものがあるので、例えばこういうNPOや企業がやっているプログラムだったり、そういう活動と一緒に参加するのは非常にハードルが低いと思うのです。なので、そういうことが可能になるような座組を用意していくのも非常に有効的ではないかと思っています。

そのほかスポーツの分野でも、これも皆さん御存じかもしれませんが、ゆるスポーツ協会といって、誰もが参加できるスポーツの在り方を模索されている方々ですが、例えばスポーツという分野でも一緒に活動できると思います。

右上はカナダの団体の例ですが、カナダの医療機関が精神障害のある方の偏見を減らすためのプログラムとして、地域の人と障害のある人と一緒にアートに取り組むとい

う活動をされています。それを研究にされていて、偏見が減った、スティグマが減ったというような研究結果も出ていたりするので、アートの分野でも障害のある人とない人が共に活動していくことも非常に良いのではないかと思います。

具体的な団体名などを出してしまっていますが、例えばこういう活動をしている団体を優先して、あるいはこういった活動をしている団体を募集して、その中から選定していくのも非常にいいのではないかと思います。そのときに気を付けなければならないのは、特別支援学校でやるにしても地域の子供たちが来やすいような環境。特別支援学校でやるときに障害のある子ばかりが集まってもあれだと思うので、地域の子が来やすい環境設定をしたり、逆に、都立の普通の高等学校でこういった活動をするときは障害のある子も確実に来やすいような仕組みをつくる。これは都が各学校などに周知することでかなり可能になる部分もあるのではないかと思いますので、そういうことをやっていく必要があると思います。

最後、そういったインクルーシブな活動の場として都立学校を活用していくのも一つ案ですけれども、もう一つは、障害のある子の地域の相談支援の場所や居場所、余暇支援の場所としても活用していけるといいのではないかと考えています。別にこれは障害のある子に限定した話ではなくて障害のない子もそうなのですけれども、特に障害のある子については、高等部を卒業した後はそのまま福祉の就労継続支援というA型、B型——昔は作業所と呼ばれたところに行かれて、そこで働かれる方が多くて、そこも地域と断絶されている。パンなどを売っていれば交流する機会があると思うのですけれども、そうではないところのほうが多いので、そうなったときに、高等学校、高等部を卒業した後の支援の場としても機能できるといいのではないかとこのように思っています。そういった子供たちが気軽に相談できる。キャリアについてや、いろいろな利用できる福祉制度がありますが、知っている子は少ないのでそういった福祉制度について知れたり、余暇についても相談できたりする場になれるといいのではないかと考えています。ここでもインクルーシブにどうか、障害のない人とある人が交わるような工夫をできるといいかなと思っています。

さっきの施設コンフリクトの研究をやっていた研究者の方が実験的に今ある自治体でやっているものは、地域の特に高齢者の方に相談員として研修をしていって、その方たちが障害のある人たちの相談を受ける。一見すると「それって本当に大丈夫なの？」と思うのですけれども、地域のために何かしたいと思っている人はすごくたくさんいると思うのですね。民生委員の方もそうだと思うのですけれども、そういう人たちが障害のある人たち

に対する偏見が今あると思うのですが、積極的に接していく機会をつくることで、例えば研修をしたり育成していくことによって関わる機会を創出して行って、実は同じ地域の人なのだということを認識していくような取組もできるとすごく良いのではないかと考えています。

あとは、余暇の場がなかなかない。これも問題ですけれども、知的障害のある方が一人でジムに行って体を動かすことがなかなか難しかったり、障害のない人であれば趣味サークルみたいなものをインターネットなどで見つけて御自分で友達をどんどんつくっていくと思うのですが、それが難しい方もいらっしゃるので、そういった方たちが趣味サークルの場としても活動できる。そういったことも活用方法としてあるのではないのかなと思いましたが、最後にこちらも提案しておきました。

私からは以上です。ありがとうございました。

【笹井会長】 どうもありがとうございました。

今の野口委員の御報告に関連して、もし御質問、あるいはここをもう少し詳しく教えてほしいのだけれどもみたいなものがありましたら是非御発言いただきたいのですが、いかがでしょうか。

【主任社会教育主事】 事務局から質問させていただいてよろしいでしょうか。

それまでは、インクルーシブな仕組みというのは、特別支援学校だけではなくて普通の高等学校でもできるような仕掛けを設けてやってみたらどうだという御提案だったのですが、最後のスライドの一番上のところですね。障害のある子供が高等部、高等学校を卒業した後の支援というあたりは、フォーカスは障害のある当事者に対して行われている提案だと思うのですが、実は特別支援学校でも青年教室という名前を主に用いながら、卒業後の社会定着を図るために、卒業生を呼んで同窓会的にやっている取組は今でも残っているのです。一定有効性はあると思っておりますけれども、今なかなか教員が土曜日を割いてやるのがやり切れないという話で、どんどんそういう機会も減っている状況です。こういうニーズにも応えていく必要性はもちろんあるとは思っているのですが、こういったものの担い手というのかな、どういうふうに確保していくとか、考えられるかということで思っていることがあったら是非教えていただけたらと思います。

【野口委員】 ありがとうございます。

どういった活動をするかにもよると思うのですが、先ほどの御提案にも少し重なりますが、必ずしも専門家でなくていいと思っています。むしろ専門家でないほうがいい

のではないかというふうにも思っています。専門的な知識がないと障害のある人と関われないということ自体が非常にインクルーシブを遅くさせていると思いますので、地域の相談員さんを地域で育成していく。もしくは例えばTEPROの方でもいいと思います。何かしら貢献をしたいと考えていらっしゃる方で、当然、全く何も分からないで接するのはその方たちも御不安に思われていると思いますので、例えばeラーニングの簡単な教材や、こうしたときにどうしたらいいという簡単なガイドブックや、何かあったときの連絡先だったり、そういった環境整備は必要だと思うのですが、学校の先生ではなくて、むしろ地域の方たちがそういったことができるような仕組みをつくっていくほうが私は望ましいかなと思っています。

【主任社会教育主事】 前にも話したと思うのですが、特別支援学校で行われている学校開放事業というのは、障害のある人の卒後対策的な意味合いで機会がつけられてきたけれども、担い手が今どんどん減ってきている。それは、どちらかというところと障害のある子供の保護者や特別支援学校の教員を中心に行われてきただけで、機会としては社会教育で地域に開かれたという説明をしているのですが、その仕組み的には全然閉じられた仕組みや運営だった。正に野口委員のスライドにもありましたように、障害のある人と接したことがない人が5割強いるということですよ。この事実がいろいろなものの阻害要因になっているのではないかと改めて思いました。是非この審議会でもその閉塞感みたいなのを打ち破って新たな切り口を出していくことがすごく重要かなと思って、質問させていただいた次第です。ありがとうございました。

【澤岡委員】 どうもありがとうございます。すごくうなずきながら伺わせていただきました。

私は高齢の方々を対象にいろいろ研究させていただいている中で、さっき地域の高齢の方が相談員に入ると高齢の方の障害のある方々への理解も進むというところで、すてきなと思ったのですが、御高齢の方で子育て支援に関わる方々で、昔の子育ての価値観を割と振りかざして、それがすばらしいことなのだと相手を追い詰めてしまうなどというお話も伺います。eラーニングだけだとなかなか難しいのかなというところで、高齢の方々にどういう働き掛けや学びのコースがあればいいのかな。もし何か既に先行事例などを御存じだったら教えていただきたいのが1点。

それから、私は今47歳なのですが、この40代ぐらいの世代は、割とコンピュータに関するリテラシー教育も受けていないですし、多世代や異文化交流や、障害のある

方々への理解やそういう教育も小学校、中学校、高等学校で全部抜けている世代です。そういう方々が育てている子供で、子供が変わっても、親が偏見を持っていたりすると、そこでまたせっかくの種が消えてしまったりというところで、併せて親子参加や、親に対する働き掛けがもし先行で行われていたり、何かアイデアがございましたら教えていただけたらと。

【野口委員】 ありがとうございます。

まず前者についてですけれども、これまでの先行事例というか、私がこれまでやったことがある事例だと、保護司さんに対する研修だったり、民生委員さんに対する研修などをやったことがあります。皆さんすごく熱心に聞いてくださっていて、私も初めは少し懸念していたのですけれども、意外と障害のある方たちへの接し方のコツみたいなものをお伝えしていくと、そこに対して「いや、それはおかしい」と言う方は、たまたまだったのかもしれないですけれども、特には見られなかったですね。障害のある人の相談を受けるときに、例えば、相手が言っていることを否定しないでまずは全部聞いてくださいだったり、本当に小さいコツなのです。そんなすごく大きな、精神障害とは、発達障害とはということをお伝えせずに、最後まで聞きましょう。見通しがないと不安な人が多いので、まずお話しするときに、これぐらいの時間お話ししましょうねと時間を決めましょうなど、一つ一つ障害特性というか、あるあるの困り事に対してはこういうふうに接しようみたいなことをお伝えしておくことは非常に有効的だったと思います。あまり多くを求めるよりは、ここは押さえてねというポイント。あと、さっきの追い詰めてしまう。ここはやってしまうと絶対悪化してしまうからやらないでねという形で、すごく分かりやすくリスト化していくような形でのお伝えは可能かなと思っています。

ただ、おっしゃるとおり、リスクというか、そこで関係性が悪くなってしまうというのも十分あり得ることだと思いますので、よくやるやり方として、1対1はすごく難しいのですよね。皆さん同じだと思うのですけれども、1対1の関係性というのはすごく難しく、そこにもう1人入るだけでその場が対立構造になりづらいというのがあるので、1対1で相談を受けるのではなくて、例えば2対1で相談を受ける。そういうふうなところで工夫をしたり、相談する場に必ず1人スーパーバイザーみたいな人がいて、その人も周りを見ていて、困ったらすぐに助けを出す。そういうような形での仕組みは必要かなと思っています。なので、研修の部分工夫するのと、何かが起こらないような仕組みをつくるのもそうなのですけれども、起こったときにもすぐ対応できるような仕組みをつくってお

くのがポイントかなと思っています。

後者ですけれども、親御さんがというのは本当におっしゃるとおりだと思います。なかなかこれも難しいのですけれども、よく私がやるのは、これは学校の話ですが、それぞれ障害のある子と障害のない子と一緒に学ぶインクルーシブな学校づくりをしていこうと、保護者の方にもその意義を説明していくというのをたまに頼まれてやります。どうしてインクルーシブな社会が必要なのか。さっき私が説明したようなことを親御さんにお伝えすることをやるのですよね。そうすると、親御さんも確かにそうだなと思ってくださる部分が多かったりする。そうしたほうが子供にとっていいと言うと——その言い方がいいのかどうか分からないですけれども、これからの時代それぞれ不確実なことがたくさん起きて、多様な人とコミュニケーションを取れたほうが子供にとってもいいですよ。そういう文脈でもお伝えしていくことで納得していただける方は多いのではないかというふうに思います。お答えになりましたでしょうか。

【澤岡委員】　そうですね。自分の子供にとってという利点が見えることが結構で、すごいヒントをどうもありがとうございます。

【野口委員】　ちなみに、これはアメリカの話ですけれども、私が通っていたアメリカの早期療育、障害のある子供が通う幼稚園みたいな機能を持つところがあったのです。そこは障害のある子に関しては無料で通えるのですけれども、障害のない子は有料で通うという仕組みがあります。逆というか、障害のある子たちばかりの中に障害のない子が2～3人いるみたいな状況をつくっていて、それは保護者が選んでそうしている。それは海外の例ですけれども、そういうこともあつたりするよとお伝えしたりもします。

【竹田委員】　ありがとうございました。特に、今回の特別支援学校に限らず全ての学校でインクルーシブな仕組みをつくるべきだというのはすごく共感しました。これから私もお話をさせていただきますけれども、いろいろな高校生向けのプログラムはやはり健常者のためにつくられています。私もいろいろな経験があるのは、視覚障害の方が参加したいと言ってくれたことがありました。その方を入れるためにすごく試行錯誤をして、いろいろなアプリを入れたり議事録を必ず用意したり、すごく大変だった思い出がある中で、それを外部の団体がやるのはすごく難しいです。でも、すごく大事なことだなと感じました。

その上で二つ質問です。私が今イメージしているのは視覚障害や聴覚障害、ある種分かなりやすい障害のイメージはあるのですけれども、実はこういう障害のある方も見落とされ

ている、そういうプログラムとうまくつながれていないというところで何か知っていることであったり、課題があれば。

もう一つは、そうした子たちは結局情報も届いていない感覚もあるのですね。そうした学校にそもそも行けないだろうという先生の思い込みで、プログラムも情報も流れてこないというのも何となく感じたことがあります。そうした機会がそもそも届いていないところでもし感じられていることがあれば教えていただきたいと思います。

【野口委員】 ありがとうございます。

視覚障害や聴覚障害、身体障害の方以外の障害種で見落とされている方たちは結構たくさんいらっしゃると思っているのですけれども、特に感じるのは、例えば自閉症スペクトラムの方だったりすると、話し合い活動や枠のない活動が苦手な方はすごく多いのです。具体的な見通しが立たなかったり、この時間は何をしていいか分からないみたいになって、プログラムから離脱してしまう子はかなりたくさんいらっしゃるのです。よく探究の時間やグループワークで話し合いを進めていくというのが多いと思うのですけれども、その枠のない活動はすごく難しいので、そういった子に向けた配慮だったり、例えばその時間は1人でこういうことをやろうと代替的な学習活動だったり、本人が選べるようにしたり、そういう工夫は必要だと思うのが一つ。

もう一つ、感覚過敏があって、音がざわざわしていて、そもそもその場に居づらいみたいな子もやはりいるのですね。そうなる、それこそイヤーマフを付けたり、そういう傾向のある子はみんなオンラインで参加するなど、ある程度音を遮断した環境にする。そういう工夫もできるといいのではないかと思います。特に探究の時間だったりアクティブ・ラーニングみたいなどころで見落とされる子たちはそういう子たちかなと思っています。

二つ目は本当におっしゃるとおりだと思っていて、これは習い事などでもそうで、親御さんも初めからうちの子は絶対無理と。先生も、これは特別支援学級の子たちは無理だなみたいになってしまうことが非常に多いです。これは当事者も同じで、例えばオンラインのイベントは今すごく増えていると思うのですけれども、聴覚障害のある方がオンラインのイベントに参加しやすいかというと、どこでも字幕が付いているわけではないので、やはり参加しづらい状況にあります。そういったときは告知だったり案内の中に、情報保障がありますよ、こういう配慮ができます、こういう例でこれまでやったことがありますよみたいなことを書いていただくだけで参加のハードルは非常に下がりますし、そういった方でも来やすくなるのではないかなと思います。

【竹田委員】 正に提案の中にあった、字幕を付けるといっても、それも結構負荷がかかる、お金がかかるものだと思うので、それを補助する仕組みだったり、団体に頑張れと言うのも限界があるなど同時に感じたので、そのあたりは大事な御指摘だったというふうに感じました。ありがとうございます。

【野口委員】 これはこの会議よりさらに大きな話になってしまうのですけれども、例えば明石市はどういうことをしているかという、そういう合理的配慮をする団体に助成をしているのですね。例えばコミュニケーションツールを導入するのに上限5万円、バリアフリー化するのに上限10万円、工事するのに上限20万円などという助成を自治体が行っている、例えばそういうものがあるとどんどん促進されるのではないのかなと思いますね。

【志々田副会長】 ありがとうございます。とても興味深く聞かせていただきました。私がお聞きしてみたいと思ったのは、学校をインクルーシブにするのにはどうしたらいいのかという発想で言うと、私でいくと社会教育施設をインクルーシブにするにはどうしたらいいのかということでスライドさせて物を考えたときに、野口委員もおっしゃっていましたが、ルールとして、障害などインクルーシブに対応できる人たちに優先的に使ってもらう。そこに施設からすると方向付けていく。こういう人たちにこういう形で使ってもらいたいのですというための環境整備をしていくことが大事だということに、とてもそうだなと思いました。

割と社会教育施設も、そういう団体さんなどには貸しますよ。例えば減免や使用料、予約期間は優先しますよと言うけれども、それ以上の優先的な呼び水になるような支援、配慮がないと思っています。誰もが参加しやすい形で、特に私たちが今ここで必要だよねと言っている団体さんに使ってもらうために何かいい動機付けというか、何かしておられる自治体や、ルールをつくっておられるところがあったら教えていただきたいと思っています。

【野口委員】 ありがとうございます。

そういう事例は私は分からないのですけれども、やはり考えられるとしたら金銭的なメリットか、もしくは人的なメリットなのかなと思います。例えば金銭的なところで言うと、団体に対してプラスアルファで活動費をインセンティブとしてお渡しする。あるいは、人的なところで言うと、こういう助言を月に1回もらえるなどもあるのかなと思います。でも、大きな団体はある程度潤沢にいろいろあるので、そこでプラスアルファは別に必要な

いすみたいな方もいらっしゃるかもしれないのですけれども、それこそ集客で困りますというところであれば、都立の学校を使えることによって学校に確実に案内ができますし、そういう意味では、大きい団体さんに関しては、それだけでかなりメリットなのではないかという感じはしていますね。

すみません。あまり回答になっていないですけれども。

【志々田副会長】 いいえ、ありがとうございます。確かに宣伝する、必要などところに必要な情報を届けられるというのは行政だったり学校が持っているとても大事なツールなので、そのところは生かしていったらいいなと今とても思いました。

【広石委員】 ありがとうございます。

いろいろと自分のやっていることを振り返ったりしながら聞いていたのですけれども、そのときにコーディネーターという人はどういう人がいればいいのかなとさっきから思っていました。さっき竹田委員がおっしゃっていた、私たちもそのときに配慮しようとしたら誰に相談したらいいかよく分からない。今の野口委員の話を聞いていたら、そうやって考えたらいいのだなということもすごくヒントになっているのですけれども、そういう人は世の中にたくさんいるといいますか、例えば社会福祉協議会に相談すればそういうふうに対応してもらえるみたいな感じだといいなと思ったのですが、野口委員みたいな視点で相談に乗ってくれる人はどういう人なのか。もしくは、そういう人を広げていかないといけないということもあるかなと思ったのです。

もう一つ、私はたまたま立教大学で教えていて、立教大学の「しょうがい学生支援室」というセンターがあって、私の今期の授業でも、この人とこの人はこういう軽い障害があって、なかなか外部から見えにくいものだけれどもこういう配慮が必要だと割と個別に送ってきてくれます。学生側にも、先生にも1回きちんと挨拶するようにみたいに伝える感じでやっているから、こういう子なのだということがよく分かって対応できます。そういうコーディネーター機関みたいなものもすごく地域の中に必要なのだろうと思ったりしたので、そういうコーディネーターは誰が担い手になるのか。そういうふうに誰かが少し間に入ってあげたほうがいろいろな団体などに対してサポートになるかと思いました。逆に言うと、もしかしたら学校開放をきっかけにそういう機能がうまく地域に根付くヒントにもなるのかなと思ったりしたので、そのあたり、野口委員のお考えを教えてくださいました。

【野口委員】 ありがとうございます。

そうですね。コーディネーターができる人は本当にいないと思います。ただでさえ、学校教育の中でも特別支援教育の担い手はすごく少なくて、皆さん教員不足は御存じだと思うのですが、特別支援学級はどんどん増えている中で、特別支援学級は今ほとんど講師が担っている状況なのです。それがすごく問題視されていて、特別支援学級こそ、より力のある先生が持つべきではないかという議論などもあって、ちょうどこの間文部科学省の報告で、教員になったら必ず10年間の中で特別支援を担当できるようにということも出たぐらい逼迫している状況ですので、そういう人が地域にいるかということ本当に少ないのではないかと思います。できるとしたら、福祉事業所を運営しているような団体はできるかなと思うので、そういったところでうまく協力を得ていくのが一つ。

もう一つは、広石委員がおっしゃっていたとおり、広げていくのがすごく大切だと思うのです。すごく難しい仕事かということ、結構慣れというか、いろいろな障害のある人と接していく。そうすると自分の引き出しがどんどん増えていくので、すごく専門的な知識が必要というよりも、結構接する機会だったり、広石委員もそうだと思うのですが、実務をやる中で学んでいけることはすごく多いと思います。育成のコースではないですが、むしろそれ自体を生涯学習の機会としてコース化していくみたいなのはすごく良いのではないかと思います。それこそこれまで特別支援学校で手話講座など単体でやっていたものを、そうではなくて、コースみたいにしてコーディネーターを。地域の中で障害のある人とインクルージョンコーディネーター、何でもいいのですけれども、そういうのをつくってしまって、そういう人たちを育成していくようなコースにして、それ自体が地域の人たちのキャリアアップにつながっていく。そういう仕組みができればすごくいいのではないかなと思いました。

【広石委員】 確かにそういう人が増えているということが、地域の皆さんが接して経験知が増えているということで、野口委員がおっしゃったように、それが普通の社会になっていくということだから、そこは行政的にも推進することがすごく大事なのかなとよく分かりました。ありがとうございます。

【海老原委員】 ありがとうございます。

お話を聞いていて質問が幾つかあるのですが、例えばこういった場をインクルージョンにするために、あえて当事者という言葉を使いますが、いわゆる当事者を巻き込みながらつくる活動などがもしあれば教えていただきたい。

お話しされていたことは、私自身が発達障害の当事者として聞いていたのですが、

すごくなずくことが多いです。私はADHD、自閉症スペクトラム、学習障害があるのですけれども、例えば今回の会議でも、実は今日などマイクの音が少し大き過ぎて聞こえて、ジージーという音がすごく耳に入ってしまった、大変恐縮ながら今片耳にイヤープラグを入れています。それでちょうどいいぐらいです。本当に少しの工夫があるだけで参加しやすいのではないかと思うのです。こういうことを入れると参加しやすくなるみたいなノウハウは是非集めてもいいと思います。もしそこに当事者が交じるような仕組みがあれば是非教えていただきたい。

二つ目は、海外でこういう事例はあるのかなと思ったのですが、よくハラルフードなどのマークがあったりしますが、それと同じように、オーティズムフレンドリーみたいなものなど、もし海外のこともお詳しいのであれば教えていただければと思います。

【野口委員】 一つ目については本当におっしゃるとおりで、もしインクルーシブな条件整備をしていく場合は、必ずいろいろな当事者の方たちを交えて意見を聞いていくのはとても大切だと思います。私も十何年この分野で勉強していますが、それでも想定できないことはすごくたくさんあって、私が良かれと思っていることも当事者の方にはそうでないことはものすごくたくさんあります。それも一人の当事者に聞けばいいという話ではなかったりすると思うので、今回の都立学校を活用するに当たって、インクルーシブな環境整備をしていきましょう、そのためにこういうガイドラインをやりましょうとなったときには、必ずその中に当事者の方も数名入っていただいた上で作成していく必要はあるかなと思っています。

二つ目については、実は明石市はステッカーみたいなものがあるみたいで、筆談できますと。筆談できますは結構いろいろなところがありますよね。何とかありますみたいな形で、点字メニューがありますというのがあったりするのですけれども、海外でもオーティズムフレンドリー、LGBTフレンドリーなどもありますよね。そういうものも日本でも今増えてきているところだと思いますので、例えばその条件を満たした団体は——そこまでやって認証するとなると大変かもしれませんが、そういうことをウェブ上に記載する。この人たちは必ず情報保障の研修を受けています、ユニバーサルデザインの研修を受けていますなど、そういうのを記載していくことで、さっき竹田委員がおっしゃったように、参加しづらい人たちも参加しやすいようにしていくのもすごく良いアイデアだなと思いました。

ありがとうございます。

【笹井会長】 いろいろな御質問を頂きまして、ありがとうございました。非常に広範

な論点について野口委員から丁寧に説明していただきまして、ありがとうございました。

まだ御質問等々あるかと思えますけれども、全体審議の時間を取りますので、そのときにお願いできればというふうに思います。

それでは、続きまして竹田委員から御報告、御提案をお願いしたいと思います。

【竹田委員】 よろしく願いいたします。全然また違う方面に行くかと思えますので、頭の切替えも一緒にさせていただきながら私の話をさせていただければと思います。私は前回の第11期の建議が本当に好きというか、それにすごく共感しているところもありまして、割とそこをベースにしたお話になるということだけ先にお伝えした上でお話を始められたらと思います。青少年の育成という観点からお話しさせていただきたいと思えます。

まず、このあたりは本当に第11期の建議をおさらいということも失礼ですけれども、私はこう捉えていますというところをさきにお話しさせていただいた上で私のアイデアのほうに入りたいと思えます。こちらはまんま建議から持たせていただいたのですが、特に青少年にかなり焦点を当てたときに、今彼らがどういう環境に置かれているのか。書かれたことをそのまま読みますけれども、変化が激しく予測がつかないこれからの時代で、青年期から成人期の間で中間的な時期が現れ、移行パターンが個別・複雑・多様化しているという表現がありましたが、私なりに解釈をすると、よく言えば、すごく新しい働き方、新しい生き方ができて、とても選択肢にあふれている世界になりつつあると感じています。ポジティブに捉えるとそうなのですが、彼らというか、私も10年前までそうだったとすると、何を選んでいいか分からないし、どう考えていいか分からない。結果それが不安につながるし、自分のアイデンティティをどう確立していいか分からない。そういう困難が今の時代、より高まっているのではないかと感じています。

余談ではありますが、小学生などと話していても、「私、将来不安なんだよね」と言う子がいたり、もう年齢は関係なくそんな子がいると思うのです。たまたま昨日大学生と話したときに小学生向けのキャリア教育をしたいと言っていて、なぜかと聞けば、「私、小学生の頃から本当に不安で、その頃に生き方を知らなかった」という話をしていたのですね。どんどん低年齢化していると思えますし、私が思うよりもっと深刻に悩んでしまう子が増えているのではないかと感じています。

今回は、小学生ではなくて高校生なので、15歳から18歳くらいを想定してお話ししていますけれども、そういった世代が、自分がどういうことに興味があるのか、どういう

ふうになっていきたいのか、そういった思いから主体的に選択をすること。そして、行動してどんどん社会で触れる中で、自分はこういうふうに生きていきたいな、こういう人たちと一緒にいたいなといった経験こそ価値があって、どんどん高まってきているのではないかと考えています。こういった経験をどう増やしていけるのか。これをどう当たり前にいろいろな高校生が経験できるようにするのか。そこが私のミッションであり、今回の前提となっているかなと感じています。

ここを増やしていく上で、これも建議を私なりに解釈したところですが、社会教育と呼ばれている学校外の教育の役割はすごく大きくなってきていると思っています。私なりに学校教育の強み、社会教育の強み・弱みを書かせていただきましたけれども、学校教育を否定する気は全くなくて、本当にすばらしい基礎だと思っていますし、いろいろ役割は変わっていくにしてもとても必要なものだと思っています。特に価値があると思うのは、より多くの人たちに、ある種当たり前に高等学校に行くからこそほとんど全ての人たちに均等な機会を与えられること。系統立てた場や機会を届けることはとてもたけている。ただ一方で、全員同じ方向に持っていきやり方が一番最適解であると今の学校教育の場では思っていますけれども、それだと一人一人の、「本当は私はこれに興味があるのだけど」、「私は本当はこれがしたいのだけど」という個別に寄り添った機会提供であったり応援はしにくい。できないというよりは、しにくい環境なのかなと思っています。一方で、社会教育というのは、そういった意味で100人、300人と大きな単位を囲まなくても、10人という単位でもプログラムをつくったり事業をつくることのできる、こういったところが社会教育の強みだと思います。今回の本旨ではないですが、非日常という、学校の日常の場ではないところに行けるからこそ出せる個性があるということもあると思っています。

私、人はいろいろな顔があると思っていまして、人というのは「私はこれだ」という画一的な何か軸があるというよりも、いろいろな軸がある、いろいろな顔があると思うのですね。そういった意味で、学校でなくて、いろいろな人と対面する中で、自分にはこういう顔があるのだということを理解できる。それもまた社会教育側の人が替わるころの良さではないかと捉えています。

そういったものを増やしていく社会教育は大事だと私は思っている中で、今、社会教育はどういうふうに変まっているかというところ、このコロナ禍で大きく変わったことが一つあります。それはオンラインというものが本当に発展したことだと思っています。先ほどのインクルージョンの話からすると、まだまだこれにつながっていない。障害とはまた違う

意味での壁がある。そういうところはあるとは思いますが、一方で、それがそろったときにはものすごく大きな機会が広がっていると感じております。

これは一人の例ですけれども、この日付がその子の参加した日付だと思ってください。ある子は1か月に2～3回いろいろなプログラムに参加する。年間通じて何十回とプログラムに参加しているのですね。オンライン、オフライン交じって、特に私として大事にしたいのは、参加するだけではなくて運営をするのも一つ社会教育の学び方だと私は考えています。そういった意味で、参加と運営、いろいろなものを繰り返す。これは関西のある高校生なのですけれども、これだけ参加できる社会になってきた。ここはすごく大きな変化ではないかというふうに感じています。

でも、こういった社会変化がある中で、高校生たち、先生は今どういう環境に置かれていると私は捉えているかといいますと、こんなに課外活動に参加できる、社会教育が発展していると思いつつも、やはり参加したことがない人がほとんどだというのは変わらないと思っています。恐らくここにいる皆さんも、「私が高校生の時そんなことはやらなかったよ」という方が多いのではないかと思います。そこはそんなに変わっていないと私は認識しています。なかなかデータがなくて、取りたいといつも思っているのですが、たまたま一つの神奈川県内の公立高等学校3年生で取ったアンケートで、70パーセントがそういうのに参加していない。しかも結構積極的な学校なのです。熱心な学校ですらもこういう環境ということは、そうではない学校はほとんどやったことがないのではないかと感じています。

文章が多いので是非後で読んでいただければと思うのですが、そういった参加できていない環境がどうして生まれているのかというと、まず学校側としては、そういう情報がいろいろチラシなどで来る。本当にいろいろな機会があるからいろいろな情報が学校には来るのだけれども、どれが信頼できるのか分からない。学校としてもやはり安心したものを届けたいというのは当然の発想としてありますので、それを選ぶのがなかなか難しい。あとは、学校教育と文脈が違い過ぎて、伝えて何の意味があるのか、意味が分かりにくい。意味があるのは分かるけれども、伝える必要性がそんなに分からない。また、社会変化で、SNSなどで高校生もいろいろなことを目にする中で先生に相談することもたくさん起きてくると思うのですが、そういう相談を受けても先生としてもなかなか探せないし、何を伝えていいか分からないという相談を実際に受けることがあります。

また、高校生たちに焦点を当てても、オンラインにたくさん情報はあふれているし、機

会はあるのですけれども、そもそもどうアクセスしていいか分からない。特にポイントだと思うのは、言葉が分からなければ検索もできない。当たり前の話ではあるのですけれども、「課外活動」という言葉もほとんど聞かないですし、「プログラム」という言葉ですら、私たちは当たり前になっていますが、高校生の発想としてない。「キャリア」すら分からないですね。検索できるのは多分「進路」しかないですね。本当はいろいろなキーワードがあるのに、それを知らない。

簡単に御紹介程度ですけれども、ほかにもいろいろな課題があると捉えています。時間がないのも大きな理由だと思います。そもそも学校が詰め込み過ぎなのではないかというお話もあるかもしれませんが、そこは一旦そういうものと捉えたときに、時間が今ない。塾、部活、いろいろなものがあって、土曜日・日曜日ですらも時間がなかったり、平日の夜にイベントに参加しようと思っても合わない。どう判断していいか分からない。あとは、大人も同じだと思うのですが、学ぶ中で一緒にできる仲間が大事ですよ。そういった仲間にもっと出会えないといった話はよく聞くかなと思っています。

今、青少年の話と学校の話をしました。社会教育団体、私たちの立場としてもいろいろな課題がやはりあると思っています。例えばこういうことをやりたい、こういう取組をしたいという企業があったとしても、なかなか届けるのが難しいというのを感じる場所があります。様々な専門性を持ったところが起業家を増やしたいなどいろいろなことを考えても、それを公民館でやろうと思ったときに、公民館は土・日が全然空いていない。そもそもその取り方が分かっていない団体も多いのですが、そういうところが取れなくてできなったり、届けたいと思ってSNSに投げるのだけれども、誰も反応しなくて結局参加者が見つからない。これはよく笑い話であるのですけれども、「プログラムのクオリティは正直関係ない。結局見せ方だよ。テクニックだよ」という話があるぐらい、本当に集めることができないというのはもったいないことだと感じています。

また、ある発信力が強い団体のところには集まるのが起きるのです。その団体のところに集まるけれども、本当はその次にいろいろ御紹介できたらいいなと本人も思っていますし、周りも思っているのですが、その横のつながりが無いが故にうまく渡していけない。ユースワークの概念からいくと、その子に合ったものがどんどんつながっていくのがベストだと思いますし、こういう団体みんながそういう感覚を持っていればいいなと思うのですけれども、そのつながりが無いところももったいないと感じているところではあります。

こうした背景を踏まえまして、どういったものができるかなと今回考えたのですけれども

も、まず学校という場を使うことにどういう価値があるのか私なりに考えてみました。結論として、学校が持つ一番の強みというのは、彼らにとってハードルが低く、一步踏み出しやすい場であることです。それはどういう意味かといいますと、一つ目は、生徒、先生、保護者にとっても安心安全な場である。学校でやるというだけで、保護者の方からしても、これだったら大丈夫かなと送り出しやすい。その裏側には、保護者が駄目と言うから参加できないという声も結構多かったです。そういうところも踏まえて、学校でやるのだったらいいよと言いやすい。先生もここへ送り出したいという思いはあるのですけれども、外部だと、行ったらチェックもできない——チェックする必要があるかどうかはおいておきますけれども、チェックもできないし、なかなか背中を押しにくい。でも、学校だったら、「あそこにあるから行ってみなよ」と言いやすいというのはいろいろな先生からお聞きする話です。

また、時間の話ですね。特に時間の制約を超えられるというのが実は学校の最大の強みではないかと思っています。放課後、部活が終わって1分で参加できる。授業を終わって5分後に参加できる。その場であるというのが学校の強みなのではないかと考えています。もちろん意欲的になっていけばどんどん外へ出ていくと思うのですが、一步目をつくるという観点においてはこれは本当に強いと思っています。

なので、私が今回御提案したいコンセプトとしては、一番参加しやすい学校という場を使うことによって、学校教育、社会教育の資源共有ができるモデルというふうに打ち出せるのではないかと感じています。学校の強み、社会教育の強みがちょうど掛け合わさることが学校という場を使うことでできると感じています。

先ほど梶野主任からもお話があったように、どのパターンなのかというところもお話しすると、私は真ん中の③のパターンだと思ってお話ししています。全ての学校がやるべきという話ではなく、③のパターンでやりたいという学校からまず広げていくイメージで理想の話をしていただくというふうに想定しています。

概念図というか、どんな形ができたらいいかというのを図にしたのですけれども、学内出張ユースセンター構想を今回御提案したいと思っています。説明すると、まず学校の中に、学校の管轄でないスペースを作るのは改めて大事なことだと私は思っています。どう大事かという、一人一人の高校生の思いや関心に基づく主体的な選択、活動を、先生がやるのではなくて、先生以外の誰かが学校という場を使って応援できるようになる。そんな場所と仕組みをつくりたい。また、ユースセンター構想と書きましたのも、いろいろな

学校でこれができることによって学校間をつなぐことができるのではないかと感じました。私の中では、学校の中に扉ができていくイメージで、一つ、学校という場に社会への扉ができていく。その扉を開くといろいろな学校の同世代の仲間と語り合えたり、つながり合える。あとは、学校の中だけではなくて、学校外の資源ともどんどんつながりができていく。そんな入り口をつくっていくイメージになっています。TEPROの話も右下に書きましたけれども、そういった外部の資源とうまくつながっていくことができればいいなど。

そのための要素として、私としてはユースワーカー。ユースワーカーの定義もいろいろあると思うのですが、一旦、建議に書かれたもので、このメンバーで議論されてきたことに基づいてという認識であるのですけれども、そういう方を高等学校に設置したい。そういった方を中心として生徒の思いや関心を中心いろいろな場をつくっていく。そんな場ができないかと考えました。

具体的な話を少しだけさせていただきたいと思います。例えば学校の空き教室などを使って、様々な外部団体、NPOと協働したプログラムをやっていくことはすごく良いなと思っています。私がいろいろ相談を受ける企業やNPOとしても、無料でいいからどんどん高校生に機会をつくりたいのだという声はあります。そういった場を先生がコーディネートしようとすると先生が大変になってしまってなかなかできない。でも、先生ではない誰かがコーディネートできるのであれば学校の中でも実施できると思いますので、そういった場をつくれたらいいと思います。

ただ、私の思いとしては、大人が、これをやればいいじゃん、こういう機会が必要だというものを学校に入れていくというのもやりつつ、高校生たち自身がその思いであったり興味に基づいて学校に誘致できる仕組みができないかと少し考えてみました。彼ら自身が、その学校にいる高校生、生徒自身が学びたいものをそこから引っ張ってくる場。かつ、多世代の学びの場になったらいいなと同時に思いついて、学校ではないところを管轄するからこそ、地域の方であったり、学校外、ほかの学校の生徒も含めて、卒業生も含めてだと思っています。そういった方々が一緒に学べる場をつくれたらいいと考えています。

もし御質問があれば詳しくお話できたらと思いますけれども、学校の中に私がすごく良いと思っている事例があります。横須賀の三浦学苑高等学校で行われている事例ですが、簡単に言うと、高校生がチームをつくって、自分たちが学びたいテーマで専門家を呼び、地域の人たちと一緒に学ぶイベントを学校の中でやっている取組になります。これは毎年、国語の授業でやっている取組で、先生がすごく大変そうな顔をされていつもやっているの

ですけれども、そこを私たちも微力ながら手伝っているのです。何がこの事例として良いと思うかという、やはり高校生自身が学びたいと思うからこそすごく意欲を持って学べますし、先生が想像したものとは全然違うテーマ、全然違う専門家が来るのですね。大人が把握できない、彼らが学びたいことを自分からつくることで、より価値があるものができる。それは高校生にとって価値がありますけれども、地域住民、関係者にとっても学びの機会になっていく。これを起こしていることがやはり良いと思っています。

あと、学校の良さは一歩目だという話をしましたが、正にそこはあって、先生も高校生が何かイベントをすると言うとすごく心配をされて、「やめとけ」と言いたくなってしまふのですね。でも、学校の中でやる分にはある程度想像できるところで、かつ、今回バックに教育庁や教育委員会があるのであれば、そこにある程度責任を任せつつできる。そういった意味でのハードルを下げることもできると思いますし、保護者なども、「何かイベントをやっているけど大丈夫なの？」と言っても、学校でやるということで少し安心して見守ることができる。

あと、低コストも学校の良いところかなと思います。これを300人の規模でやるとしたら一体幾らかかるのだとなりますけれども、学校という場所を使えると割としやすいのではないかと思ったところです。

今のはイベントをやっていくという話ですが、イベント以外にも個別の相談をするブースをつくる。例えばユースワーカーが常駐していて、休み時間や昼休み、放課後、いろいろな時間で相談を受け付ける場がつけれる。あと、今学校の中で挑戦をするというお話をしましたけれども、学校の外に出ているいろいろな社会経験をすることも取り組んでいくサポートができたらいいのではないかも感じています。

その上で、私として大事にしたい観点として、これも彼ら高校生が中心となってつくっていくことかなと思っています。私の団体の事例で恐縮なのですが、この間オンラインで、高校生自身が同世代に自分の経験を語る。特に課外活動をした経験を語るイベントを開かせていただきました。この経験からすごく私が感じたのは、大人が幾ら、「これをやったほうがいいよ」、「将来こうなるからこんな体験が大事だ」と言うよりも、同世代の人たちが、「これ、楽しいから」、「これ、そういう経験があったから」と語るほうがよほど強い影響力があるし、やってみようという気になるのだなと改めて思ったところです。それを始めていくにはつながりがすごく大事で、相談できる同世代や、ああいう子ができるのだったら私もできると思えるきっかけをつくっていく。オンラインでやるので、どうしても

意欲の高い子が多く集まってきましたけれども、これを学校の中などでできれば、学校の中で先輩、後輩でこういう文化ができていくと思いますし、相談できる人ができてくると思います。まして都立高等学校の300人いる学校でなかなか自分と同じ興味がある人に出会えないと思うのですけれども、こういう場があることによって実は同じ学校にも同じ仲間がいたのだということが増えてくるのではないかと考えています。

資料を作り過ぎて話し過ぎたと思いますので、この辺の事例は少し飛ばしたいと思いますが、こんな例を生み出せたらいいなということがあります。もしよろしければ後で読んでいただければと思います。今お話しした延長でいろいろなストーリーが、高校生自身がどんどん変わっていく事例が生まれたいと考えています。

私の話で伝わり切れなかったもので、今右に出ている事例だけ少しお話ししますと、今の話は割と意欲的な高校生を対象とした想定での話だと思うのですけれども、決して意欲的な層だけがこの枠組みで何か解決されるわけではないというふうにも考えています。例えば居場所カフェがいろいろな高等学校で今開かれていると思います。校内カフェなどいろいろな名前があると思うのですけれども、そういったユースワーカーみたいな方が何をしてもいいよという場所を定期的につくることができれば、ターゲット・アプローチと言われるようないろいろ困難を抱えた子たちもそこに現れて、そこから社会につながっていく。社会の助けてくれる人たちにつながっていく入り口にもなり得るのではないかと考えています。とにかくいろいろな子がいるのが学校の特徴かなと思いますので、その子一人一人が自分に合った居場所を見つけていく。その入り口を学校の中につくりたいというのが私が考えたこの構想になります。

この構想というのは学校にとってもメリットがあると思っています。梶野主任のお話にもあったような学校をサポートすることも当然あると思うのですが、具体的にどういうサポートができるかというと、キャリア教育、探究学習でつながりや情報面のサポートをすることもできると思います。カリキュラム内でなかなかできないのだけれども、もっと体験活動をさせたい、もっと彼らにいろいろなインプットをさせたいという先生もたくさんいらっしゃると思っています。そういったものを一部ここに移管することができる。先生方も個別相談するのは時間がなくて対応し切れないという悩みもあると思いますので、個別相談をしてもらえる場所ができる。学校の特色になる場所もあると思いますし、社会教育団体にとっては、簡単に言えば、高校生にいろいろ届けることができるようになっていくことがあるのかなと考えています。

まとめていきますが、つまり、どういう仕組みをつくりたいかという、東京都教育委員会からユースワーカーの派遣団体みたいなところに委託して、そこからユースワーカーをいろいろな学校に派遣していく。そこにサポートする仕組みとして、社会教育団体のプラットフォームを東京都教育委員会のほうでうまくつくって、どんなユースワーカーが行っても、その個人につながりを委ねるのでなく、都が認定している安心できる団体と連携をしていろいろなプログラムをつくったりサポートすることができるようになっていく仕掛けをつくれなかな。

実施日についても、何も全部の日にやらなくてもいいと思うのですね。週末だけでもいいし、放課後だけでもいいし、いろいろなパターンがあるのではないかと思います。この辺も学校のできる範囲でやっていけばいいと思いますし、学校の特色を出してつくっていくのが大事かなと考えています。

その他細かいところですけども、高校生に魅力がしっかり届く仕組みにしなければ、場所だけあっても人は来ないと感じています。なので、ウェブやSNSといったところにしっかりと発信できたり、「かっこいい」コンセプトと書きましたけれども、これからの時代に合った、「生涯学習ってかっこいいよね」という雰囲気をつくっていくのがとても大事だと私は考えています。もしこれを本当に実現するのであれば、そういった格好良く見えるコンセプトをつくるにはかなり力を入れたほうが良いと考えています。

また、先ほどお話したような社会団体のプラットフォームといいますか、いろいろな団体が世の中にたくさんありますけれども、どれが安心していいのかというのはやはり分かりにくい。そこを何かしら認証する仕組みを東京都教育委員会で作ったり、何か団体と連携してつくったりする中でユースワークみたいなことがしやすくなるような仕掛けづくりができればいいなど。

学校側のメリットとして出せるものが何かあるかと思えば、空間づくりの補助などもすごく良いのではないかと考えています。アクティブ・ラーニングやいろいろな学び方が学校の中にありたいという思いがある中で、それができる教室がないというのもよく聞く悩みかなと思います。なので、学校の一つの教室かもしれませんが、そういう場所をつくれるよというところを一つインセンティブに、これができる学校を増やしていくこともできたら面白いのではないかと考えました。

まとめになります。私としては、学校という場所を使って、より多くの青少年が社会教育に触れる一歩目をつくっていく。それをサポートできる仕掛けをつくっていけたらいい

いのではないかと考えました。また、そうした学びが、実は青少年だけではなくて、周りの地域の方にも価値があると思いますし、ひいては、高校生が学び続ける姿勢をここで磨ければ、そこから学び直すという、次の大人になったときにもまた学び方が変わってくると思いますし、いろいろなものにつながっていくのではないかと感じています。

以上、私からの提案になります。

【笹井会長】 どうもありがとうございました。非常に多岐にわたる具体的な案を出していただきまして、とても面白く聞かせていただきました。

まず、竹田委員からの今の御提案、御報告に関して質問があればお受けして、その後お二人の御報告、御提案について全体討議、全体で審議をしたいというふうに考えています。

初めに、竹田委員の今の御報告に関してもし質問等ありましたらお願いしますが、いかがですか。

【横田委員】 御報告、ありがとうございました。高校生主体に事業やイベントを主催して、それを周りがバックアップしていくような形で主体性などを育てていくという話、すごく興味深く聞かせていただきました。

例として挙げてくださった横須賀の三浦学苑高等学校の事例などで、高校生が主体で活動されているところで、これに関しては、支援者というか、どのような大人がサポートしているのか。学校教員だけではなく、外部の方や地域の方が携わって実施しているものなのか。学校教員の役割がどうであるのか。外部とのつながりをうまく構築しているからこそうまくいっている活動なのかというのを伺いたいと思いました。

【竹田委員】 ありがとうございます。

こちらについては、先生が基本的に中心にサポートしているというふうに捉えていただければいいと思います。特に外部の定期的なサポートがあるわけではないと思っています。その先生がやっていらっしゃるの、先生自身が元々地域とのつながりがかなりある。積み重ねてきた方で、あの先生の生徒だったら大丈夫、あの先生の名前を出せば、「ああ、その子ね」というふうになる地域の空気感が少しだけできてきています。その上で先生が結構生徒の話聞いて、「じゃ、あなたが連絡してみれば」、「まず、あなたが相談してみたいよ」というのを先生がつながりのある範囲で紹介しているケースが多いです。先生から生徒にメールアドレスを教えて、そこから生徒が連絡をし、そこからは生徒が自主的に広げていく。そんな一歩目を先生がつくっているのがとても強みになります。

先生につながりがないときに、私のような外部のコーディネーターといますか、社会

教育団体が、こういうつながりがあるからあの人だったら相談できますよと生徒にお伝えして、生徒が会いに行く。そんな取組を生徒自身がやる。授業の要素というのは、毎週時間がありますので、その時間の中で先生が結構細かく、大丈夫か、悩みがないか、そういったところを聞いてサポートしていると伺っています。

【横田委員】 御提案いただいたユースセンター、ユースワーカーの構想ですと、そういったコーディネーションする方の役割が非常に重要だったり、ノウハウやコネクションを持っていらっしゃる先生みたいな方の存在が非常に重要になって、特に高校生が主体で出てきたアイデアでどんな団体を紹介するのが適切かというような情報を持っている方であったり団体が非常に重要になると思うのですけれども、そういった情報や人のデータベースを持っている方にどうやって関わっていただくのか。アイデアがあれば伺えればと思います。

【竹田委員】 正にそこが今ないものだというふうに感じています。だからこそプラットフォームをつくるというふうに御提案させていただきましたけれども、東京都教育委員会であったり公的な機関が旗を振ってつくっていく必要があるのではないかという案が一つ。

ただ一方で、地域というもっとローカルな拠点で見るときには、きつとつながりがあると思うのです。もう既にそういうコミュニティがあるところはあると思いますので、いかにそうしたコミュニティにプラットフォームみたいなのところがつながっていけるか。ゼロから何かつくっていくよりは、今あるものを少し可視化していくだけでも大分見えるようになってくるのではないかと考えているところではあります。

【野口委員】 ありがとうございます。

是非教えていただきたいなと思ったのが、最後のほうで、高校生にとって魅力的であることが大切とおっしゃっていて、オンラインでフォーラムを開かれたと。それは限られた人たちだったけれどもとお話しされたと思うのですが、そちらに参加された人たちの参加意欲というか、動機というか、何を求めて参加されたのか少しお聞きしたいと思ったのですけれども、いかがですか。

【竹田委員】 ありがとうございます。

まず、格好良さというところは私ももっと学んでいかなければいつも思っているところではあるのですが、このフォーラムに参加してくれた子としてはいろいろな理由がありました。まとめ切れていないのですが、ずらずらと言っていくと、まず一番多かったのは、

こういう課外活動をしている子たちとツイッターでつながっていて、「すごいあの子と会ってみたい」、「あの人ともっと話してみたい」。プチスターというのでしょうか、芸能人ではないですけども、同世代の中で憧れられる人が一定数いるのです。そういった人たちを今回巻き込んで十何人に話をしてもらったことがあります。例えば東北の子が5～6人参加しているのですけれども、東北で活動している高校生といたらあの子みたいな子がいたり、関西で有名な高校生といえばあの子みたいなのがいる。そういった子たちを見て、私もああなりたい、ああいう活動してみたいと思っている人が今回集まってきたというのが一つ目です。

二つ目は、部活や学校の後輩を連れてきましたという子が結構多くいました。きらきらした有名人ではなかったとしても、いろいろなプログラムに参加して、こういう課外活動がすごく良かったからもっと多くの人に知ってもらいたいという高校生は割と多いのですね。経験した子こそ、そういうことを言い始める。大体みんなそう思うという話ですけども、その子たちが自分の後輩や友達を誘って来てくれる。あとは、そういう子たちがインスタグラムなどで、「今度これをやります。みんなで行きませんか」とやると、何か楽しそうだな、行ってみようかなと。一番面白かったのは、同級生などで全然接点はなかったのだけれども、インスタで流れてきて、「何かいつもあの子が楽しそうにしているのを見ていたから私もやってみたくて、全然課外活動なんてしていなかったんですけど来てみました」みたいな子も中にはいらっしゃいました。

学びという言葉を使っていますが、本当は楽しい。部活でもなく、塾でもない。でも、何かもっと新しい高校生活の一つの方法として課外活動というのが見えてきた子たちからすると、何かやってみたい、参加してみたいというものの一部にはなっている。その子たちがどうすればいいか分からないからここに来ましたというのが総じてフォーラムで捉えたニーズではありました。

【笹井会長】 ありがとうございます。

それでは、時間も大分たっていますので、全体の審議に入りたいと思います。今お二人から御報告、御発表いただきましたけれども、それぞれの委員の皆さんの御質問を含めてでいいのですが、御意見を中心に審議をしたいというふうに思います。どなたからでも結構ですけども、そういうものを頂ければありがたいと思います。いかがでしょうか。

【広石委員】 竹田委員への質問的になってしまうのですけれども、学内出張ユースセンターはすごく良いなと思ったのですが、学校へのユースワーカーの配置と学内出張ユース

スセンターは何が違うのか。より竹田委員がしたいことは、学校へのユースワーカーの配置的なところなのか。学校開放とは何かというところかなと今考えたのですけれども、あまり入り込み過ぎても逆に学校開放……。その辺が私の中で整理ができていなくて、確かに竹田委員のおっしゃるようなことで、例えば学校にユースワーカーがいて、学校の中で先生が苦手なところをうまくサポートしていく仕組みをつくっていくほうがより効果的なものかもしれないし、そういうフレームワークでない形の良さも多分あると思うし、そういったときにどういうふうに運営していくのかみたいなこともいろいろ考えていたところです。まとまっていないのですけれども、その辺はいかがでしょうか。教えていただければというか。

【竹田委員】 ありがとうございます。

私の意見というか、悩みというか、考えたときの難しいところ、両方お話しできたと思うのですけれども、まず私のイメージとしては、学校の例えば一教室をずっと自由にユースワーカーが使える場所をつくる。それがこの学校開放の仕組みとしてできたらいいなと思ったところではあります。例えばずっと空き教室があったとすれば、その空き教室はずっとそのユースワーカーの方がいて、何ならその方はふだん別の仕事をしていてもいいと思うのですけれども、そこで仕事をしている。休み時間などには相談に乗れたりする。放課後などにはその人を中心にいろいろイベントを開いたり、外部のNPOなどがやるときの施設管理ですね。外部の団体がやるときにはその施設管理をその人がやる。今までの議論で言うとコーディネーターと言われていたものをユースワーカーという言葉に置き換えたというか、役割を少し転換させた。そういったイメージで言葉を使っていました。

今までの議論は、どちらかというところ、場所だけあって、その場所を外部の団体が使えるようにしようという方向といいですか、イメージだったのですけれども、それだけだと、結局、生徒にとって面白くないものがたくさん生まれそうだったり。学校の文脈だけでいき過ぎると、実際事例としてあるのは大学の先生ばかりが来て、大学のためだといって大学の教授がたくさん話をしに来る。それはそれで価値があるのですけれども、生徒が本当に知りたいのはそこだったのかな。ほかにももっとなかったかな。そういう青少年の正にユニバーサル・アプローチみたいな観点に立ってはなかなかうまくいかないイメージがありまして、そこで何が必要かと思ったときに、ユースワーカーの設置が必要だと考えたのが私の思考の流れではありました。

ただ、いろいろお話を聞く中で改めて大事だと私も思ったのは、インクルーシブの概念

もありましたけれども、何か好き勝手にただのユースワーカーがやるよりも、インクルージョンの仕組みだったり、何かより観点を持って取り組む人ができるようになると思います。それができる人は結局誰なのだろうというのは私もまだ解決し切れていない。そういう団体に自分がなれたらいいなと思いますけれども、誰がやるべきなのかみたいのところまでは見切れていないというふうには感じています。

【広石委員】　そうですね。ただ、学校開放という言葉の定義の問題かなと思うところがあって、その辺が議論なのですかね。今みたいな常設的に一つの教室を外部団体が入るように学校開放するという考え方の学校開放が今回のここで話すことなのか。学校開放という定義の在り方だとは思ったりして、その辺がどういうふうに扱っていけばいいのかなと思ったところではありました。

【笹井会長】　今の段階ではそういう可能性があるということもいいと思います。

【広石委員】　いろいろな可能性があるということでまずは考えていくということですよ。分かりました。

【福本委員】　御提案、ありがとうございます。お二人の委員の方の御報告を伺っていて二つプラスアルファで考えたことがあります。

まず一つ目、今の学内出張ユース構想というお話ですけれども、私は今のお話を伺っていて、完全に杉並区立和田中学校で昔あった夜スペシャルというものと同じ——同じではないですけれども、すごくイメージしました。要は、学習塾が公立中学校で塾を開くというあのパターンですね。ですので、私は非常に面白いというか、実現可能な御提案ではないかと思いました。その上で申し上げたいのが、先ほどの野口委員のインクルーシブの御提案もそうなのですけれども、この御提案を学校開放のどのパターンに当てはめて構想するかということで少し見え方が違ってくるのではないかというふうに思いました。

例えば今の学内出張ユースセンターというのは、分かりやすいパターンで考えればパターンⅢだと思うのです。ただ、私はあえてパターンⅤでもいけるのではないかと思ったのです。そのほうが逆に面白いと思いました。そうすると、同じネタというか、アイデアなのだけでも、パターンⅢで考えるかパターンⅤで考えるかで対象も効果もまた変わってくるだろうと思ったのです。ですので、今後議論を進めていく中で、この提案をこのパターンで考えるとこんな発展があるだろうし、このパターンで考えればこんな可能性があるのではないかという議論もあっていいかなと思いました。

もう一つ、パターンⅢで考えていったときにネックになるのは、教員が手放せるかどうか

かというところだろうと私は思ったのです。教員は、カリキュラム外のことであったとしても、対象が自分の生徒となると、いろいろな機能を外部に手放すのはなかなか難しいところがあるかなと思いました。そこがうまくクリアできればⅢでもいけるし、逆にⅤでいったら私は面白いかなと思いました。これは、先ほどのインクルーシブのところ、お話を聞いていくと、例えば特別支援学校の卒業生を対象にしたイベントでありながら実は地域の人材を育てるというふう置き換えることもできると思うのです。それが今申し上げたパターンⅢで考えるかパターンⅤで考えるかということ少し違って、両方可能性があったと思います。学校開放のパターンに当てはめて頂いた御提案を落としていくと、こんなシミュレーションが考えられるという議論ができたらいいのではないかなというのが1点目です。

2点目ですけれども、これは事務局にお問合せというか。やはり今この議論の中でコーディネーターがどういう機能を果たしていくのかということ、これが次の考えなければいけない、具体化していかなければいけないところだと思うのですけれども、これは同時並行で考えていけばいいのではないかなと思いました。この後でコーディネーター機能を考えましょうとするのか、同時並行で一応たたき台はつくっていくとされるのかということをお尋ねできればと思いました。

あと、これは全く議論からそれるかもしれませんが、施設開放といった場合に、このコロナでこれだけオンラインが進みましたので、場を開放しなければいけないのか。それとも、関係者は学校に集まるけれども、例えば特別支援関係はもしかしたらオンラインのほうが広いことができる。要はハイブリッド型と言ったほうがいいのでしょうか。そういうことを今後の学校開放事業の中で検討していくのかどうか。その可能性があるのかということ、今すぐにお答えではなくても、今後検討していてもいいかなと思いました。

【主任社会教育主事】 ありがとうございます。事務局と申しますか、事務局の代表というような位置付けでお答えさせていただきます。事務局の全体の意見ではないかもしれませんが、コーディネーターの機能は、恐らく切り離して考えるよりも一つの文脈の中でいろいろ検討していったほうが良いように思うので、それぞれの御提案から掘り下げていく中で審議ができるといいかなと。

実はコーディネーターの話というのは、過去から見ても、自発的に動き出して活動している方では大変面白い活動になっていくのですけれども、今国のほうでも地域学校協働活動を始めて、たくさんコーディネーターと名の付く人が生まれてきてはいるのですが、公

のほう、上から依頼する。行政などだと何年までに何人、何地区獲得しますみたいな目標を立ててしまうと、そちらが目的化してしまって、どうも形式化しているのが感じられる部分なのです。その行き詰まり感といいますか、学校支援も始めたときは、有名なところで言うと杉並の生重さんあたりが動き出したときは完全に自発的に動いていた活動だったのが、いつの間にか行政が施策にすると行政の請負型の活動になっていくみたいなこともあるので、一つ一つの活動の中からコーディネーターの役割を考えていくとともに、どんな担い手がいるのかということに関してもそんな中から議論をしていきたいと思います。コーディネーターというのはこの世の中にとっても必要だと思いつつ、なかなかそれが機能してきていないというのが学校と地域の連携の部分においてはすごく大きな課題かなと思います。

施設開放の話は、福本委員の御提案のとおりで、ハイブリッド型の開放というのは検討し得るのではないかと思います。特に特別支援学校の肢体不自由の子や病気などを抱えている生徒たちのことも考えたり、そういう人たちとの交流という観点からしても、そういう形の学校開放が十分考えられるかなと思って伺いました。

【澤岡委員】 どうもありがとうございます。

すみません。的外れなのかもしれませんが、学校の中でユースワーカーのお話を伺っていて、各都立学校であると。その中で、自分の学校を起点にしていろいろな活動やいろいろな場が開けていくという視点はすごくすてきな。正に移動時間も1分、2分というところ。

でも、もう一つのところで言えば、きらきらしている子が増える反面、そこに生きづらさを感じる。それから、自分の学校の中に居心地の悪さを感じている子供たち、そこに対してはどうアプローチできるのかなと少し気になりまして、緩やかさという部分の中で別の学校の部分に参加できる。シニアの中でも、自分のまちの地域活動には関わりたくないもので、わざと自転車で隣の町内会活動に参加しているおじさんなどいます。その起点になったのが生涯学習大学でいろいろな学びがあって、学習のコーディネーターの方と話をしていたら、「あちらの町会に入れるわよ」みたいな話で自分の世界をつくっていったみたいなこともありました。ユースワーカーが介在することで緩やかにほかのいろいろなコミュニティにも関われるみたいな多様な参加がある。多分そういうことも考えていらっしやるのかなと思って、そのあたりを伺えたらと思います。

【竹田委員】 ありがとうございます。

先ほどの福本委員のお話も含めて是非私もお話があるのですが、先にパターンのお話だけいくと、パターンⅤは私も思っています。Ⅲだけではないとずっと思っていたので、本当に御指摘のとおりだと思います。パターンⅢ、Ⅳ、Ⅴのイメージでは、右上に東京都が主体になってやっていくのはⅣ、Ⅴだという定義があったので一旦外しただけでありまして、目的のところは、おっしゃるとおり、パターンを変えればいろいろな発想ができる。私のポイントとしても、学校ごとに目的が変わってくるだろう。特徴が変わってきますのでパターンが変わるだろうと思っていたので、そこは私も考えてみたいと思ったポイントでした。

澤岡委員の御質問に戻しますと、おっしゃるとおり、いろいろな場を一つの教室を使ってできると理想なのだろうと私も感じます。例えば先ほどカフェという話をしましたけれども、何してもいい時間だよみたいなのがあって、お菓子でも食べに来ればいいじゃん。そういう時間をつくっていくことによって本当に幅広い子が来る。ユースワークの一つのポイントは接点をいかにつくるかということだと思いますので、その学校にいる子の中でもいろいろな居心地の悪さがあって、例えば意識が高過ぎる子、いわゆるギフトドみたいな子たちからすれば、意欲が高くてほかと話が合わない。だから、もっと高度な議論をしたいという意味の居心地の悪さ。そういう意味では、きっといろいろな専門家を呼んだ議論や、先ほど私が提案したようなイベントなどは刺さると思います。逆に、そういう子がきらきらして、私は何もできないという子に対しても、きっとそういう子向けの悩み相談の場であったり、ユースワークの観点でイベントをいろいろ仕掛けていく。そういう中でまず接点をつくるのが大事だと思います。

その上で、説明不足だったのですが、特に出張ユースワークの一番大事なのはその先につなぐことだと思っていて、たった一つの教室で全部やるのは難しいと思うのです。しかもユースワーカーもめちゃくちゃ多く配置することはできない。そうしたときに適切な場所に促していくのが一番大事な機能だと思っていますので、今お話のあったように、例えば私はバイトしなければいけない、全然勉強に集中できないみたいな居心地の悪さであれば、そういう子を支援する学習塾みたいなところを紹介できたら最高だと思います。意欲的で、起業したい、もう学校なんて行っている意味が分からないみたいな子からすれば、起業家に学べる場所へ行けばいいかもしれません。いろいろな入り口を見せるユースワークをこの場でできて、そこからいろいろなところにつながって、その感じる居心地の悪さが取り除かれて、居心地の良い場所をその子に見つけてあげるお手伝いをでき

る仕掛けになったらいいなど、私も本当にそう思うところでありました。

【広石委員】 先ほどの福本委員の、同じ活動でもパターンⅢとパターンⅤで大分内容が変わってくるのではないかというのは、なるほどとすごく思ったのですけれども、そういった意味では、パターンⅠ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴは何の違いかという、ガバナンスの違いとか、意思決定や進め方の違い、そのステークホルダーの関わり方の違いみたいなどころだと思えるのです。ですから、同じ内容でもどういふふうになっていくのかというところがすごく変わってくるのだらうと、さっきの御意見を聞いて思いました。

そのあたりの整理もまたおいおいでいいと思うのですけれども、パターンⅠ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴについては、何となく皆さんイメージを共有していると思うのですが、もう少しリアに、パターンⅠはこういうふうな手順で、ここが最上位の優先順位としてあって、こういうふうな意思決定過程を経ていく。そういったところも明確にしていってあげれば、逆に活動する側も、そういうパターンだったら、さっきのより自由にできたほうがいい。学校とここは握っておくのだけれども、ここから先は自由にやりたいみたいなどころでいうとこういう活動ができるよねと。確かにその辺とセットだとさっきの御意見を聞いて思ったので、そういったところもこれからの議論の中で、すぐでなくてもいいと思いますけれども、明確になっていくと。そうするとコーディネーターの役割も変わってきますよね。学校側とのコミュニケーションや先生とのコミュニケーションをより深めていくことをしないとイケないのか。それとも、ある程度自由にやれるのか。その辺が変わってくるのだらうと改めて今日思ったので、そのあたりの整理も少し必要だということが分かりましたというコメントです。

【志々田副会長】 皆さんの議論を聞いていて、今どんな活動をするのかということによってパターン化という方法もあると思ったのですが、もう一方で施設に着目すると、この活動に向いている施設。例えば都心の一番便利などころにあって、すごくすてきなものがみんなに見えていて、これを使いたいと思う人がいっぱいいるところにお勧めの学校開放の在り方と、それは学校の事情などではなくて、そういう意味ではニーズがそこに集まっているので、こういう開き方をしたいですよということが提案できるかなと思います。一方で、学校のそれこそ魅力化みたいなものをより求められているような高等学校に対しては、パターンⅢをうまく学校側にも利用してもらって、少しコーディネーターにとっては大変かもしれないけれども、東京都教育委員会が支援していくようなことも、学校側にもお願いしていくのができるかなと。施設によっての学校開放の在り方みたいなものもこ

の先議論ができると、もっとより具体的に。

ついこの間、世田谷にあるすてきな高等学校を見たので、こんなところを使いたいなと思ったのです。そのときに、そういう施設に魅力があるところと、そうではなく人に魅力があるみたいなの……。私は東京は不慣れなので分からないのですが、きっと施設の特性みたいなのを分類してもらいたいのかなと思いました。

【笹井会長】 ありがとうございます。ほかにいかがでしょうか。よろしいですか。

今日は本当に議論が盛り上がり、ありがとうございました。とても貴重な御提案だったと思います。多岐にわたる物の見方、アプローチの仕方、論点など、それに伴う、私自身がいろいろ気付いていないことを気付かせてもらったということで、正直、私も何かしゃべらなくてはと思っていたのですけれども、頭が混乱というか、いろいろな方がいろいろなことを言うもので、何をしゃべっていいのか。後で事務局もまとめるのが大変ではないかなと勝手に思ったりして、とても良い勉強になったと思います。また、この御提案は、資料も頂いているので、家に帰って、今日の議論も踏まえて読み直してみようかなと思っています。そういう意味では、皆さんの積極的な御意見を頂きまして、ありがとうございました。

次回ですけれども、次回も引き続き委員の皆様から御報告、御提案いただきたいと思っております。次回は澤岡委員と海老原委員にお願いしようと思っております。御本人の御了解も頂いております。お二人ともお引き受けいただきまして、ありがとうございます。よろしくお願ひいたします。そういうことで次回も闊達な議論ができればと考えています。

それでは、事務局から御報告をお願いしたいと思います。よろしくお願ひいたします。

【生涯学習課長】 笹井会長、どうもありがとうございました。

次回、第6回の全体会でございますが、6月29日水曜日18時になります。会場は都庁第二庁舎31階特別会議室22となります。

事務局からは以上であります。

【笹井会長】 6月29日18時からということで、次回もよろしくお願ひ申し上げます。

それでは、これで東京都生涯学習審議会、第5回になりますが、全体会を終了させていただきます。皆様、御協力ありがとうございました。

閉会：午後4時00分